


## ～第 63 回全国漁港漁場大会参加報告～

——青森市・マエダアリーナにて——

山本 均



10月25日、青森市郊外のマエダアリーナを会場に第63回全国漁港漁場大会が開催された。これは毎年、各都道府県持ち回りで実施されていて主目的は漁業関係者の団結の元に漁業の発展、強化を図っていかうというもの。東京都からは総勢〇〇名、新島村からは私を含め4名が参加。全体では1,000名ほどでいつもより少な目ということだった。

アリーナの会場は暗く、このため中で撮った写真はすべてボツ。大会のプログラムは主催者あいさつ、来賓祝辞等を経て付議議案の「漁港・漁場・漁村・海岸整備の促進に関する件」を決議し、この後、取組事例の紹介として3件の報告があった。このうち印象に残った三重県鳥羽磯部漁協答志支所青壮年部の浜口輝満氏の発表を取り上げたい。

伊勢湾というと一般にアワビや真珠の養殖が目につかび、豊かな漁場といったイメージが強い。ところが近年、アワビなど磯根資源が著しく減少し、その原因として漁場のアラメ場の衰退があり平成17年から当地の漁協青壮年部がその造成に取り組み始めたという。

アラメ海草場の回復にはアラメの幼体を自然石に付着させ静穏域に投入し食害防止のネットを張って育成し、成長したアラメを磯に移植するというもの。投入時20センチ程度のものが1年で1メートル以上に成長し徐々にではあるが、磯焼けが解消しつつあるとのこと。

ただ、この取組は最初から順風満帆だったわけではなく、自然石が流されたり資金不足のため各自が潜水免許を取って作業に当たったりと様々な障害を乗り越えての成果であったことを静かに訴えていた。

こういった話は新島村の漁業にも大いに参考になるのではないだろうか。だから漁業関係者こそが参加すべき、そんな気がしている。特に技術的な問題というよりも取り組み姿勢、考え方は学ぶべき点があるように思う。



大会会場へ急ぐ出川村長、前田議長他。雨模様の予報だったが、運よく午前中は晴れとなった。

出川村長は東京都漁港漁場協会の会長を務めている。会場では舞台のヒナ壇に着席したが、照明が暗く撮影写真はボツとなって残念。

大会会場のマエダアリーナ前でポーズを決める山本一磨議員。この一風変わったアリーナの名称は市内でスーパーマーケットを展開する地元企業が命名権を買い取ったことによる。



大会終了後の午後、視察に訪れた会場から20キロほど離れた同じ陸奥湾内の清水川漁港での漁船の作業風景。トラックから降しているのはホタテの稚貝を取付けた網。これを沖合の定位置に据え付け育成していく。